

Seishin Campus

229



おもな記事

- ・創立75周年記念事業について
- ・産学連携・スタディーツアー 報告
- ・長期・短期留学 報告
- ・研究室探訪
- ・大学院名称変更について
- ・渋谷サステナブル・アワード2022優秀賞受賞 報告
- ・4号館/聖心グローバルプラザのご案内 ほか

創立75周年記念事業ロゴマーク・キャッチコピー最優秀賞受賞学生



聖心女子大学 創立75周年記念事業について



聖心女子大学は 2023年に創立75周年を迎えます

聖心女子大学は、1948年、日本で最初の新制女子大学の一つとして出発し、2023年には創立75周年を迎えます。

これまでの聖心女子大学のあゆみを振り返りつつ、75周年を記念するさまざまな事業を計画しています。これらの事業は、聖心女子大学が100周年に向けてさらなる発展を遂げていくために、近年の社会の動向にも目を向けながら学生を交えて企画しているものです。

75周年記念事業の内容を、75周年特設サイトで皆様に現在進行形で発信してまいりますので、ぜひご覧ください。（右記QRコードからお入りいただけます）



75周年特設サイト

<https://75.u-sacred-heart.ac.jp/>

宮代グリーンプロジェクト

キャンパス緑化

桜並木の再生、北門からの坂道の植樹等ー

キャンパス環境の整備

ー学生の憩いの場・活動の場の整備等ー

旧久邇宮邸の時代から受け継がれた正門から続く桜並木は、毎年入学式の時期に新入学生の目を楽しませてきましたが、近年では老化が目立ってきています。慎重な調査と準備によって、この桜並木を再生していきます。

学生が自由に活動できる場として、屋内外のパブリックスペースを拡充していきます。パブリックスペースの場所や名称については、学生のアイデアを募集します。



大学アーカイブズプロジェクト

アーカイブズ事業には、未来を支える力があります。卒業生の皆様の記憶と思い出の品々が大学の財産となり、100周年へ向けた未来への礎となるよう活動してまいります。関係者の皆様、大学史資料の寄贈へのご協力をお願い申し上げます。



大学史資料の収集



収集資料の整理



卒業生インタビュー

卒業生から寄贈された、1964年の東京オリンピック時に着用された通訳の制服

史学専攻の大学院ゼミで、創立期のStudent Government (学生自治会)のノートで、学生とともに読み解いています。

学生団体が、SDGsを体現する卒業生のインタビュー動画を制作します。

寄贈をお願いしたい大学史資料 (例)

- 制服、校章 ● 講義ノート ● 行事の印刷物 ● 写真 (アルバム) ● 画像データ、映像 ● 初代学長 エリザベス・ブリットにかかわる品 ● 1948~1970年頃の創立期の歴史を伝える資料 ● その他、創立期の大学生生活についてご存知の情報 など

創立75周年記念事業ロゴマーク・ キャッチコピーが決定

10月21日（金）に創立75周年記念事業ロゴマーク・キャッチコピー最優秀賞の表彰式が行われ、高祖学長から最優秀賞受賞者である英語文化コミュニケーション学科4年の小淵さんに表彰状が授与されました。

高祖学長は「在学生、卒業生、教職員から多数の応募があった。アイデア溢れる秀作が多く、厳正に審査を実施した。最優秀作品は、細部まで75周年事業に対する思いを込めて制作されており、見た人が興味を持ってもらえるような優れた作品である。」と高く評価しました。今回選ばれたロゴマークとキャッチコピーは、創立75周年記念事業を中心に様々な場面で活用し、学内外に発信される予定です。



*Rooted in the Past,
Stepping into the Future*



受賞学生のコメント

この度は、このような表彰式を催していただき、ありがとうございました。今回、創立75周年という節目を記念するロゴマークとキャッチコピーとして、私の作品を選んでいただき大変光栄です。私は2年次生のときに英語のオンライン授業で「点と点を繋げる」というスティーブ・ジョブズ氏のスピーチを観て大変感銘を受けました。彼の人生は良いことばかりではなく、困難なこともあったそうです。しかし、「あとで振り返ってみると、すべての出来事が繋がっていて、無駄なことなどなかった」と言うのです。この話を聞き、居ても立っても居られなくなった私は、自粛生活で貯まったお金でiPadを購入し、イラストやロゴの制作を始めました。

一生に一度の成人式が中止になり、友人にもなかなか会えなくなり、コロナ禍で急に思うようにいか

なくなった大学生活でしたが、この辛い気持ちや経験もどこかで実を結ぶと信じて努力しました。そして、今回のチャンスが訪れ、迷うことなく挑戦し、評価していただけたことで、すべての点は繋がって『道』になったのだと身に沁みて感じました。

今回制作したロゴマークは『道』がモチーフになっています。キャッチコピーの『これまでの歩み、これからの道』を表現しました。中国の小説家、魯迅が「もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」と言ったように、75年間繋がってきたこの道は聖心女子大学に関係する皆様の歩みの賜物だと考えています。これからは私たちの歩みが100年、150年へと道を繋げていくのだ、ということ忘れずに進んでいきたいと思えます。

ご支援のお願い

創立75周年記念 聖心女子大学振興基金（USH基金）

2023年度に創立75周年を迎えるにあたり、創立75周年記念事業を推進するため新たに「宮代グリーンプロジェクト」、「大学アーカイブズプロジェクト」を寄付事業目的として、これまでご支援をいただいていた聖心女子大学振興基金（USH基金）の中で、75周年記念事業推進のための募金活動を開始いたします。皆さま方の温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。



ご寄付は
こちらから

ANA(全日本空輸)グループ と連携した実践的な課題 解決型授業を開講

益川 弘如
MASUKAWA Hiroyuki
教育学科教授



研修の施設見学の様子



VR研修を体験



実機をもとにした
シミュレーター体験の様子

現代教養学部教育学科の授業「人間学習9」を受講する学生らが、株式会社ANA総合研究所ならびに全日本空輸株式会社の協力を得て、「仮想空間技術などの情報通信技術は人の学びをいかに変えるか?」についての学びを深め、「航空業界の未来につながる学びの場」を検討、プレゼンテーション提案しました。

授業では、ANAグループの総合訓練施設「ANA Blue Base」の施設にて、客室乗務員や航空整備士の教育・学習の場を見学・体験。ここでは、VR技術を活用した訓練環境を実際に手にとって体験したり、実物の機体をもとに設計されたシミュレーター環境などを操作したりしながら、最先端技術の導入によって、本物の場と仮想の場がいかなるかたちで共存しているのかを実感することができました。

そして、単なる技術習得ではなく、おもてなしの心など、経営ビジョンを共有し深めていくような環境も整えられていました。

◆ANA Blue Baseを見学・体験した学生の声

- ・ANA Blue Base を訪問し、技術が進化し時代が変わっていく中で効率的に効果的に学ぶ方法を追求するANAの進化し続ける姿を学びました。全てを機械に頼るのではなく、人の力と技術の力を合わせて、あらゆる事例を想定し、最善を見つけ出すから能力を育てている点がとても素敵だと思いました。その一つ一つの経験が安全で快適なフライトに繋がっているのだと感じました。
- ・お客様の命を預かるお仕事として、緊張感を持って整備や保安等の訓練を行っていることを改めて実感しました。訓練の中でVRやシミュレーターを使用していることを知り、時代の変化に伴い、訓練をアップデートしていることにも感銘を受けました。
- ・コックピットのシミュレーションの席に座って体験したり、VRや最先端技術を使いながら飛行機に乗って訓練したりと1日で多くの貴重な経験をさせて頂きました。コロナ禍でなかなか思うような大学生活を送れなかったのですがこのような機会を下さきり一生の思い出ができました。

スタディーツアー



那覇空港と海を臨む



沖縄タイムズ社での意見交換



自衛隊那覇基地での
ブリーフィング

国際政治学演習ゼミ 沖縄での夏合宿報告

坪内 淳
TSUBOUCHI Jun
国際交流学科教授

国際交流学科の国際政治学演習(ゼミ)は、コロナ禍での中断を経て、3年ぶりに沖縄での夏合宿を行いました。沖縄は、かつての戦争の重く深い爪痕とともに、米軍基地関連の諸課題、そして現在の国際環境のなかで緊張感をます地政学的位置づけ、さらには県民の抱える社会経済的な諸問題と、日本の課題が複合的に現れている最前線といえます。受講生は、事前にグループに分かれ、沖縄のこのような問題と歴史を多角的に調査、発表し理解を深め合ったあとに、現地での合宿に突入しました。

平和祈念資料館、ひめゆり祈念資料館はもちろんのこと、県立博物館では復帰50年関連展示を丹念に見学しました。さらに、航空自衛隊那覇基地で半日以上の充実した見学、意見交換の機会があり、その後、現地新聞社である沖縄タイムスを訪れ、基地問題に詳しい記者の方と長時間にわたって質疑応答を行いました。(なお例年訪問している在沖アメリカ総領事館はコロナ対策のため後日オンラインで意見交換をしました。)

このように立場、見解の異なる方々からの生の声を聞くことで、問題の複雑さ、困難さを痛感できたようです。参加者からは、信じられないくらい濃密な数日間であった、大学生として間違いなく思い出に深く刻まれる経験になったという声が寄せられています。

ご協力いただいた現地の多くの方々から心から御礼を申し上げます。



長期・短期留学報告



交換留学

ただ今
日本に
留学中！

ALARY Lucile

フランス国立東洋言語文化大学より
(留学期間：2022年度後期～2023年度前期)聞き手：日本語日本文学科4年清田さん。
所属学科の学生パートナーとして
アラリさんをサポート。

留学生の受け入れ、学生派遣が本格再開

岩田 一成
IWATA Kazunari
国際センター長

2022年度より夏期休暇を利用した短期派遣留学が再開しました。3年ぶりにカナダのマギル大学へ10名を派遣しています。国際センターでは学生の安全・安心な海外派遣を確保するため、数次の危機管理セミナーを開催し、安全・安心な海外渡航のために万全を期しています。長期派遣留学もコロナ前の水準に戻っています。韓国へは過去最多の9名を派遣し、その他カナダ2名、米国1名、台湾1名計13名となりました。

外国人留学生の受け入れに目を向けると、15名(台湾9、韓国5、仏1)が来日しました。コロナ前の2019年度が6名(フランス1、韓国3、台湾2)だったことを考えると大幅な増加です。2020年、2021年と渡航が難しかったため、留学生の念願がかなっての来日となりました。留学生のみなさんはとても元気で、週末となると日本全国各地を旅行しています。国際センターとしても、留学生歓迎企画として浅草散歩、歌舞伎観劇など日本人在校生との交流の機会を設けています。みなさん、積極的に参加して、キャンパス内の国際交流にも貢献してくれています。来年度以降はコロナ禍以前にも増して活発な国際交流が期待されます。



歌舞伎座にて

アメリカ

教育学科初等教育学専攻3年
小座野 幸
KOZANO Sachiサンフランシスコ大学
(留学期間：2022年度後期～2023年度前期)

サンフランシスコ大学には様々なバックグラウンドを持つ学生が集まっており、生徒も先生も1人ひとりの意見を尊重していただけます。授業では様々な意見に耳を傾けると同時に、自身の経験を積極的に共有することを心がけています。多様性とは何か、どのような他者との向き合い方が多様性を生み出すのかについて考えさせられる毎日です。休日は学寮の留学生と出かけたり、大学主催のカヤックやスポーツ観戦などに参加するなど、平日と休日の切り替えを行いながら生活しています。

長期留学

韓国

国際交流学科異文化コミュニケーションコース3年

白井 なを子
SHIRAI Naoko韓国カトリック大学
(留学期間：2022年度前期～後期)

カトリック大学の学園祭に、中央学園祭運営委員会スタッフとして参加しました。2日間にわたって開催された学祭は規模がとても大きく、学科ごとに露店の出店、サークルのブース参加、ダンス・音楽サークル・芸能人の方のステージまであり活気に溢れていました。団体の中で唯一の外国人スタッフであり、最後までやり遂げる責任感と臨機応変な対応が求められる仕事を通して、学ぶことが多い濃い2日間でした。体力勝負の活動ではありましたが、文化イベントの裏側を直接体験し、何より韓国の学生とイベントを1から作り上げるという貴重な体験になりました。

カナダ

国際交流学科グローバル社会コース3年

高橋 楓
TAKAHASHI Kaedeラルバ大学
(留学期間：2022年度後期～2023年度前期)

ケベックについた日、私は日本に帰りたいと思いました。親元を離れて暮らすことも、フランス語を使って日常生活を送ることも初めてで、今まで考えないようにしてきた不安と向き合わざるを得なかったからです。ですが、そのようなネガティブな気持ちはすぐに消えました。他の学生に助けってもらったり、イベントで知り合った友人に支えてもらったりしながら日々楽しく過ごしています。こちらでの生活も残り半分となりましたが、アルバイトや後期からのバカロレアの授業でまだまだ新しい挑戦が続きます。今しかできない経験をたくさんできたらと思います。



観光と社会の適切な関係を探究する

人間関係学科

岩原 紘伊 専任講師
IWAHARA Hiroi

専門

文化人類学、観光研究

文化人類学との出会い

高校生の時に、卒業生の看護師の方にアフリカで青年海外協力隊として活動されていた経験を聞く機会がありました。もともと国際開発の問題に関心があり、それがきっかけとなって、大学では国際関係学を専攻しました。そこで国際協力論などを学ぶなかで、実際に開発がそこに暮らす生活者にどう影響しているのかが気になり始めたんです。ゼミの指導教員に相談したところ、そうしたことを研究するには、文化人類学が適していることを聞き、一から学び直しをする決心をして日本の大学を退学し、スコットランドのエディンバラ大学人文科学・社会学部社会人類学と開発コースに入り直しました。エディンバラ大学を選んだのは、開発プロジェクトにかかわる研究者が多く、具体的な事例や現場の話が聞けると思ったんですね。

佐渡でのフィールドワークと観光との出会い

エディンバラ大学では、聖心と同じように卒業論文提出が必須で、フィールドワークやライブラリーリサーチかを選択するのですが、私はフィールドワークを選択して、大学3年の夏に佐渡島に渡り、トキ野生復帰プロジェクトに関する調査をしました。「生活」と「自然保護」がどう両立しているのか、そこを調査する目的で調査に入りました。佐渡では、有機農業を推進しながら、トキが生息しやすい環境作りを進めているコミュニティがあります。そこに暮らす方々が経済活動と自然保護を両立させるためにどう努力されているのかを調査したかったです。当初の目的はそこにあったわけですが、新たな発見もありました。

佐渡は観光地としても有名ですから当然観光客も大勢来ます。その観光客のなかに、トキの保護活動をしているコミュニティに協力する形で、活動を支えている方々がいらっしゃいました。観光という形をとりながら、活動を支えるという姿に新鮮な驚きというか、興味を持ちました。卒論は完成したものの、新たなテーマが生まれたことで、自分のなかに未消化なモノが残っているのが気になっていたんですね。そんな思いを抱えながら戻ったエディンバラ大学の図書館で、東京大学の先生が書かれた「Bali and beyond: Case Studies in the Anthropology of Tourism」という本に出会いました。まさに自分が求めているもので、観光という現象がもつ文化への多様な影響を、世界

有数の観光地であるバリ島の事例を示しながら紹介していました。その本との出会いがあり、大学院は、東京大学で教鞭をとっていらっしゃるその先生の研究室の門をたたきました。そこから、本格的に観光を対象とした研究が始まりました。

これからの観光のあり方を考える

現在、私が調査地としているインドネシア・バリ島は、スハルト政権下で、80年代から一大リゾート地化をめざして大規模開発が行われてきました。観光開発はバリ経済の成長を促した一方、環境や文化に大きな負荷をかけています。バリでは新型コロナウイルス流行前は、人口を上回る約500万人の国際観光客を受け入れていました。観光客はゴミも出しますし、水も使用します。バリ文化の基盤は農業とも言われますが、水が不足すると農業を維持することも難しくなります。そこで地元のNGOなどが中心となって、それまでの暮らしを変えることなく、観光を支えるための「住民主体型の観光」をすすめています。この動きに注目し、観光と社会との適切な関係はどのような形なのかを、バリの事例を通してこれまで考えてきました。

はじめて予備調査のためにバリを訪れたとき、タクシーでぼたくりにあう(笑)という体験もあり、観光地は怖いという印象を持ちました。また、都市部では生活のスピードが速く、ヴィラ用に土地を売却する張り紙があちこちに貼られているなど、観光はバリの人びとの生活全体に多大な影響を持っていると実感しました。そうした意識がバリに暮らす人びとのなかに少しずつ共有されはじめて、自然環境との付き合い方も含めた「文化」と「生活」を両立させる先述の「住民主体型観光」に共感を持つ人たちが増えてきていると思います。

私は2年間ホームステイをしながらバリに滞在しました。その間バリの人々の暮らしに密着して、生活の在り方を日々見つめながら感じたことは、コミュニティで営まれる日常生活そのものがバリ文化を育てているということです。これからの観光を考えたとき、「文化」とは、そこに生きる人たちが連綿と繋がり作り上げてきたものであり、そうした人たちの暮らしがあるからこそ、私たちは魅了されることを意識する必要があるのではないかと思います。昨今、オーバーツーリズムが問題となっていますが、観光客の増大は、現地に暮らす人々の暮らしに直接負荷がかかります。そうした問題を現地の方々とコミュニケーションを取りながら考えていきたいと思っています。

受賞報告

渋谷サステナブル・アワード2022で優秀賞を受賞 10月25日(火)授賞式



※渋谷サステナブル・アワード
渋谷区では「渋谷区環境基本計画2018」に基づく「意識」分野の施策として、「サステナブルを浸透させる」「サステナブルに取り組む主体の交流の場をつくる」ことを目的に、区内で活動する人々の意識と行動に働きかけるプロジェクトとして、渋谷区らしい持続可能なライフスタイル、事業活動を募集し、表彰する渋谷サステナブル・アワード事業を実施。
(渋谷区WEBサイトより)

本学の「宮代サステナブルキャンパスプロジェクト～SDGsの先へ～」が渋谷サステナブル・アワード優秀賞を受賞しました。授賞式にはSHOC project、学生会役員会、Earth in Mindの代表学生3名と学長が表彰式に出席しました。これまでの受賞団体のなかで、教育機関としては初の受賞となりました。

これは、学生の活動を中心に持続的に実践してきた本学の社会貢献活動が認められた形です。これを機に、近隣地域のサステナビリティを目指すコミュニティメンバーの一員として、学生・教職員が一体となって持続可能なキャンパスづくりを実現するため、これまでの活動を軸に、さらに発展させていきます。

公開セミナー

外務省共催「中央アジア+日本」対話・公開セミナー 「中央アジア及び周辺地域における女子教育の現状と展望」

11月12日(土) 宮代ホール

外務省との共催による「中央アジア+日本」対話・公開セミナーが本学で開催されました。2022年は日本と中央アジア5か国(ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン)の外交関係樹立から30周年にあたり、本セミナーはその記念事業の一環として行われたものです。



なお、本セミナーに先立ち、セミナー前日には、一部の登壇者が本学のキャンパスを訪れて、学生の案内により学内各所や授業を見学して交流を深めました。

大学院名称変更

大学院が2023年4月から文学研究科を人文社会科学 研究科に名称変更・研究領域を新設

聖心女子大学大学院は2023年4月、現在の「文学研究科」(Graduate School of Arts)の名称を「人文社会科学研究科」(Graduate School of Humanities and Social Sciences)に変更します。(2022年9月時点 文部科学省に設置届出申請中)。

これは2019年度に学部において「文学部」から「現代教養学部」に名称変更を行ったことに伴うものであり、今回の名称変更によって、人文科学のみならず、社会科学を含む幅広い学問分野を擁する研究科の特徴がより一層明確となります。加えて、博士後期課程人文学専攻に史学研究領域を新たに設置。これにより、現代教養学部全8学科すべての学問領域が大学院博士後期課程までおかれることとなり、学部から大学院まで一貫した教育体制の提供が可能になります。

なお、この体制が適用されるのは2023年4月以降に入学する学生からとなります。

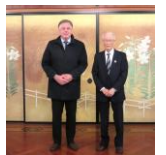
特別授業

チェコ大使を招聘 史学科と国際 交流学科共催で特別授業を開講

12月9日(金) 宮代ホール



12月9日に史学科「ヨーロッパ現代史I」と国際交流学科「地域研究2」共同で、駐日チェコ共和国マルチン・トムチョ大使をお招きして特別講演会「チェコ共和国、EU、そして日本—100年を超えるチェコと日本の繋がり—」を開催しました。美しいチェコの映像やクイズも交えながら、チェコの歴史やEUにおけるチェコの役割、チェコと日本との交流などについて理解を深める貴重な機会となりました。



聖心のクリスマス

Christmas at the University of the Sacred Heart, 2022 —平和を祈る—

今年の「聖心のクリスマス」のテーマは、学生の提案により「平和を祈る」と決まり、11月28日、「クリスマスツリー点灯式」が行われました。



12月2日には「アドベントの集い—みんなで迎える聖心のクリスマス—」が行われ、学生たちから寄せられた祈りの数々がスクリーンに映し出された後、皆が心をつなげて祈りを捧げました。同じ会場のロビーでは、初めての「クリスマスマーケット」を開催。当日の売り上げは、ユニセフをはじめとする各種慈善団体に寄付されます。



聖心祭報告

第58回聖心祭 対面・オンライン開催ともに無事終了

10月15日(土)・16日(日)開催の第58回聖心祭は天候にも恵まれ、無事終了いたしました。ご来場いただいた皆様、オンラインでご参加いただいた皆様には心より感謝申し上げます。

今年度は〈雅〉をテーマに、各団体が普段の成果を直接皆様にお届けする場を設けることができました。3年ぶりの対面開催ということもあり、3年次生の保護者の方から、初めて聖心祭に来ることができました、とお声をいただく場面もありました。



無事に終了できましたこと、心より感謝申し上げます。

4号館／聖心グローバルプラザのご案内



開催中

OPEN

BE * hive展示 (WEB展示も公開中)

4号館BE * hiveは、地球規模の課題に向き合い知性を磨く、あるいは課題解決に向けた活動に積極的に参加することを願って作られた展示スペースです。現在、以下の展示を開催しています。

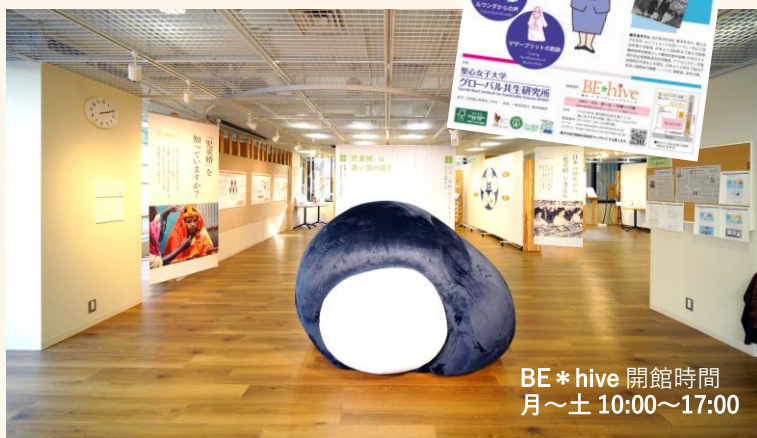
緒方貞子さんと聖心の教育



「緒方貞子さんと
聖心の教育」
WEB展示



本学第1期生の緒方貞子さんの人道支援への強い信念は、初代学長マザーブリットが実践した人間尊重の精神に通じるものがあります。当時の貴重な写真や実物の展示品や、緒方さんの思いを受け継いで、平和構築のためにルワンダで尽力する人たちが経験を語る動画を公開しています。



BE * hive 開館時間
月～土 10:00～17:00

「いま、『女性』はどう生きるか」 第IV期「世界から『命の誕生』を考える」



－「命の誕生」における違いとは－

ひとつひとつの命は守られるべきであり、尊厳があるものです。命そのもの、そして命の誕生について世界に目を向けた時、国や地域によって異なる現状があるのをご存知でしょうか。本展示では、世界の妊娠・出産にまつわる違いについて紹介します。そして、様々な違いがあっても、地球に生まれてくる命を育むために必要な支援やサポートについて皆さんと考えてみたいと思います。



「いま、『女性』は
どう生きるか」
WEB展示公開中



グローバル共生セミナーのご案内

聖心女子大学グローバル共生研究所では、地域に開かれた場所を目指し、どなたでもご参加いただけるグローバル共生セミナーを開講しています。新しい世界とつながり、学ぶ。その第一歩としてお気軽にご参加ください。



手話講座(対面時)

【今後の開講予定】オンライン開催

1) ことばと文化 「インドネシア語の世界」

多くの島・民族からなり、バリ島を代表に、魅力あふれる島国インドネシア。その多様な文化とともに、シンプルで学びやすいインドネシア語の簡単な会話や挨拶を学びます。

開講日時：
2/27 ㊦、3/2 ㊦、3/6 ㊦、3/9 ㊦ 19時～21時

受講料：本学学生・高校生以下無料
一般：5,000円
協励会賛助会員：4,000円
他大学学生：3,000円

2) ことばと文化 「手話の世界」

講師の豊富な手話体験をうかがいながら手話の世界について学びます。受講者一人ひとりが教わったばかりの手話を使って語り合う和やかな手話講座です。

開講日時：2/18 ㊦、2/19 ㊦ 10時～12時
2/25 ㊦ 10時～12時・13時～15時

受講料：大学生以下無料
一般：2,000円
協励会賛助会員：1,000円

詳しいご案内、お申込みは、グローバル共生研究所ウェブサイトからご確認ください。新年度以降、上記講座以外にも、様々な講座を開講予定です。

<http://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp>



聖心女子大学
グローバル共生研究所
Sacred Heart Institute for Sustainable Futures (SHISF)

